

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32635

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12814

研究課題名(和文)多死社会における仏教者の社会的責任

研究課題名(英文)Buddhist Social Responsibility in Death-Burdened Society

研究代表者

林田 康順(Koujun, Hayashida)

大正大学・仏教学部・教授

研究者番号：50384681

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文):超高齢・多死社会の我が国で、これまで老病死を扱ってきた僧侶がどのような役割を果たしうるかを明らかにすることが本研究の目的である。

2017年5月から8月にかけて、高齢者ケアに従事するケアスタッフへのアンケート調査を行った。質問紙の構成は大きく分けて、勤務する施設での取り組みについて、高齢者ケアの経験・考え方について、僧侶との連携の経験・考え方について、属性についてである。アンケートを分析した結果、ケアスタッフのなかに僧侶との協働のニーズがあること、信仰の有無とケアへの前向きさの相関関係があること、宗教がバーンアウトの保護因子となる可能性を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文): In present-day, Japan is facing a super-aged society with numerous deaths. The purpose of this study is clarifying the role of Buddhist priests in contemporary Japanese society, who have, historically, dealt with life and death.

We conducted the questionnaire survey in May to August 2017, to care workers who have worked in geriatric clinics and elderly nursing homes. The questionnaire items consist of their (1) works, (2) view of geriatric care, (3) view of cooperation with Buddhist priests and (4) attribution.

By the analysis of the survey, we revealed the following: (1) there is a need for cooperation with Buddhist priests among care workers; (2) there is a correlation between religious follower and positive attitude toward geriatric care; (3) believing religion have the potential to become a protective factor against burnout.

研究分野：仏教学

キーワード：宗教の社会貢献 認知症 バーンアウト予防 スピリチュアルケア 高齢者ケア 看取り 臨床宗教師
臨床仏教師

1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国は、今後、数十年は死者が増加する多死社会となることが予測されるが、少子高齢化により、現役世代への負担増や身寄りのない高齢者の増加が懸念されている。その結果、人は自らの死を迎えることも、死者として送られることも、従前のようにいなくなるということが指摘されている。そのような状況を見越して、経済産業省では、2012年に「安心と信頼のある『ライフエンディング・ステージ』の創出に向けた普及啓発に関する研究会報告書」を発表し、ライフエンド(死)とその前後を「ライフエンディング・ステージ」と規定し、各段階でのサポートに携わる担い手の連携を模索・促進している。

また、多死社会を迎えるにあたり、死にゆく者へのケア(ターミナルケア)、遺族の悲しみへのケア(グリーフケア)も喫緊の課題となっている。2012年に臨床宗教師講座(東北大学)、2013年に臨床仏教師講座(全国青少年教化協議会)が開講され、公共空間で心のケアをおこなう宗教者、特に仏教師の育成が始められている(臨床宗教師講座の受講生の大半は仏教師である)。

仏教師は伝統的に檀信徒や近隣住民の死に関わってきた、いわば死の専門家でもあり、グリーフケアの専門家でもあり、多死社会において果たすべき責任は大きいと考えられる。同時に激しい社会変動の中で新しい取り組みへの必要に迫られることも予想される。一方で、いまだに布施・戒名料の不透明性への批判、過疎化・宗教離れによる寺院活動の縮小など、仏教界には課題が多く、多死社会への危機感も希薄であり、社会問題の解決に寄与する資源をもちながらも、埋没している現実がある。

(2) 研究動向を概観すると、海外を中心とした仏教研究では、1990年代頃よりベトナムのティク・ナット・ハンやインドのアンベドカル、チベットのダライ・ラマなど政治や社会制度に深く関与する仏教師が注目をあびるようになり、Engaged Buddhism という概念が形成されていった。日本にも2000年代から紹介されるようになり、『社会をつくる仏教 エンゲイジド・ブディズム』(阿満利磨、人文書院、2003年)、『日本の社会参加仏教 法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理』(ランジャンナ・ムコパディヤヤ、東信堂、2005年)などが著されている。

近年の宗教学界や宗教界では、『社会貢献する宗教』(櫻井義秀・稲場圭信編、世界思想社、2009年)、『社会貢献する仏教師たち』(臨床仏教研究所編、白馬社、2012年)など、「宗教の社会貢献」が積極的に議論をされており、特に東日本大震災は、僧侶による心のケアや寺院の避難所利用など、仏教師の役割が見直される契機となり、公共空間での仏教師の活動、社会貢献が注目されるようになっていく。

2. 研究の目的

本研究では、超高齢・多死社会が抱える様々な課題の中から、「認知症を持つ人の増加とその対応」にテーマを絞ることにした。認知症を持つ人は右肩上がりに増え続け、高齢者人口が4割に至る2055年には人口の1割が軽度認知障害以上の症状を抱えると予測されている。それに伴って重度の認知症を持つ人が入所する施設や病院では、施設内での看取りの増加により、スタッフが死に直面する機会もより増えることが予想され、最前線を担う関係者の情緒的消耗への対応も喫緊の課題となっている。

一方で、宗教界では、臨床宗教師や臨床仏教師などスピリチュアルケアを行う宗教者(日本型チャプレン)の育成が行われ、「超高齢・多死社会」に対する宗教者の関わり方への関心は増している。しかし、医療機関・介護施設等の受け入れ側の宗教的なニーズに対する体系的な把握や、伝統的な宗教行為による関わりの可能性に関する研究は、まさに緒に就いたところである。

このような問題意識を背景として、高齢者ケアに従事するケアスタッフの僧侶との協働に関する認識を可視化し、実態把握・分析を行ない、仏教師の社会的責任の一端を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究ではアンケートによる量的調査を行なった。まず、勤務する施設の取り組み、高齢者ケアの経験・考え方、僧侶との連携の経験・考え方、回答者属性の項目で構成された自記式調査票を作成、協力を得られた関東地方の10施設(医療施設2、高齢者福祉施設8)を対象に留置き法で2017年5月から8月にかけて実施し、95.6%(配票数338、有効回収数323)の匿名化された有効票を得た。(本調査にあたっては、大正大学研究倫理委員会の承認を受けている。)

アンケートに用いた尺度であるが、ケア観については、KH・フロンメルトが開発した「ターミナルケア態度尺度」の日本語版(FATCOD-Form B-J)の短縮版(6項目)を使用した。この尺度は、死にゆく入所者に対するケアスタッフのケア態度を測定する尺度として、計量心理学的に十分な信頼性・妥当性を有することが示され、広く使用されているもので、「死にゆく患者へのケアの前向きさ」と「患者・家族を中心とするケアの認識」という二つの下位尺度に分けて使用できるものとなっている。

また、ケアスタッフの燃え尽き度合いを測る尺度として、久保真人による「日本版バーンアウト尺度」を使用した。この尺度も、計量心理学的に妥当性が証明されているもので、17項目の設問から成り、情緒的消耗感、脱人格化、個人的達成感の三つの下位尺度に分けて使用できるものとなっている。

なお、回答者の属性は以下の通りである。

		人数	%
性別	女性	219	67.8
	男性	104	32.2
年齢	20代/30代	164	50.8
	40代/50代	142	44.0
	60代/70代	17	5.2
勤務場所	特別養護老人ホーム	180	55.7
	医療機関	96	29.7
	老人保健施設	47	14.6
職種	施設長	1	0.3
	看護職	82	25.4
	介護職	179	55.4
	心理職	4	1.2
	生活相談員	18	5.6
	ケアマネジャー	5	1.5
	機能訓練指導員	11	3.4
	医師	5	1.5
	その他	18	5.6
経験年数	10年未満	144	44.6
	10年以上	179	55.4

4. 研究成果

(1) アンケート調査では、協働の形態として、「入所者の不安・悩みへの傾聴」、「入所者家族の不安・悩みへの傾聴」、「季節行事としての読経や法話」、「気軽に話ができるカフェやサロン」、「外出先としての寺院利用」、「スタッフの不安・悩みへの傾聴」、「死別後の遺族に対する個別面談」、「スタッフ向けの研修会などでの法話」、「遺族会などでの読経や法話」、「見送りとしての読経や法話」、「菩提寺・墓地探しなどの仏事相談」の11項目を掲げ、それぞれに関わり方として「良いと思う」、「どちらとも言えない」、「良いと思わない」の選択をしてもらった。

結果、高齢者福祉施設や医療機関で求められる仏教者のかかわり方（仏教的ケアニーズ）として、「入所者の悩み・不安への傾聴」（70.3%）、「入所者家族の悩み・不安への傾聴」（65.3%）など、仏教色を前面に出さない支援行為が上位に並んだ。

しかし、「季節行事としての読経や法話」（49.8%）も高いニーズを示しており、必ずしも仏教色を排したケアだけが求められているわけではないことがわかる。また、下位項目では「どちらともいえない」の割合が多く、この“態度保留”を除けば、全ての項目で「良いと思う」が「良いと思わない」を上回った。

このことは、条件によっては仏教色のあるケアが受け入れられる可能性があることを示していると考えられる。

したがって、現場では、多様な引出しを持ち、入所者や患者のニーズにあわせた仏教者の関わりが求められているといえる。

さらに、二値化（良いと思う／どちらともいえない・良いと思わない）した仏教的ケア11項目と、宗教への親和性、入所者および入所者家族からの相談の有無をクロス集計し、二乗検定を実施した。

すると、宗教への親和性がある人ほど、「気軽に話ができるカフェやサロン」、「外出先と

しての寺院の利用」など、場の提供へのニーズがあることが示された。

また、相談の有無との関連では、入所者本人からの相談を受ける人ほど、「入所者の悩み・不安への傾聴」、「スタッフへの悩み・不安への傾聴」など、仏教色を前面に出さない支援へのニーズを感じていた。

一方、入所者家族からの相談を受ける人ほど、「季節行事としての読経法話」、「気軽に話ができるカフェやサロン」、「スタッフ向けの研修会などでの法話」、「スタッフへの悩み・不安への傾聴」、「外出先としての寺院の利用」など、仏教色の有無を問わない多様なケアニーズを有していることもあきらかになった。

(2) ケアスタッフの年齢や対人援助職経験年数によってターミナルケア態度に差が見られるのかどうか分析してみたが、有意な差は見られなかった。そこで、信仰心の有無によりターミナルケア態度に差があるかどうかを測定したところ、信仰が「ある」と答えた人は、尺度のなかでも特に「死にゆく患者へのケアの前向きさ」のポイントが有意に高かった。つまり、年齢や経験年数よりも、信仰のある人ほど、死にゆく入所者へのケアを価値あることと感じたり、死にゆく入所者と親しくしたり、その人と死について話をしたりすることについて前向きな傾向があるという結果が示された。

それでは、信仰を持たない人が介護という死に関わる業務を通じて宗教に関心を持つことはあるのかを明らかにするため、「あなたは高齢者ケアの仕事を通じて、宗教や宗教的な考えに関心を持つようになりましたか」と尋ねた質問項目に注目した。

すると、個人的な宗教は無いが、業務を通じて宗教に関心を持ったことが「よくある」、「すこしある」と答えた人が計51名いた。そこで、「どうしてそのような関心を持つようになりましたか」との問いへの自由記述を見ると、認知症の入所者に向き合う際の葛藤や、死に直面する苦しさ、信仰のある入所者との関わりなどをとおして、宗教への関心を高める場合があることが見えてきた。

以上のことから、ケア提供者の信仰は「死にゆく入所者へのケアへの前向きさ」にプラスに影響し、またターミナルケア業務への従事を通して宗教的なものへの関心が高まる可能性が示唆されたといえる。

(3) 病院に勤務する看護師(61名)・介護士(15名)と、施設(特養および老健)に勤務する看護師(21名)・介護士(163名)に限定して、ケアスタッフのバーンアウト(燃え尽き症候群)について分析を行なった。

はじめに、病院・施設のケアスタッフは、入所者の死とどのように関わっているか、病院と施設で差はあるのかを見てみると、病院のほうが多くの死に関わる機会が多い一方で、気持ちの整理はいずれのケアスタッフもできていること、入所者から死の不安を相談

されることはどちらも 2 割程度であることがわかった。

次にケアスタッフのバーンアウトを比較してみると、施設では「脱人格化」が多く見られた。そこで、ケアスタッフをバーンアウトから守るものは何かを考察するために、「死にゆく人に対するケア提供者のケア態度」と「バーンアウト尺度」の相関関係に着目した。すると、施設では、死にゆく対象者へのケアに前向きであることは、情緒的消耗感や脱人格化に対して保護的であることが有意に明らかであった。

そこから、死にゆく人をケアすることが「尊いこと」、「意味があること」と思えるような仏教者の介入が、ケアスタッフをバーンアウトから救う可能性があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1、岡村毅、川室優、「貧困、孤独、絶望にある人の終末期を支える」『精神科』32 巻 2 号、2018 年、106-110 頁(査読無)

〔学会発表〕(計 5 件)

- 1、高瀬顕功、「高齢者福祉施設における仏教的ケアの可能性」、日本仏教社会福祉学会・第 52 回学術大会、2017 年
- 2、小川有閑、「超高齢・多死社会に僧侶が求められるもの」、日本宗教学会 第 76 回学術大会、2017 年
- 3、高瀬顕功、「高齢者福祉施設、医療施設における宗教的ケアの現状とニーズ」、日本宗教学会 第 76 回学術大会、2017 年
- 4、問芝志保、「ケア提供者の宗教観とケア観」、日本宗教学会 第 76 回学術大会、2017 年
- 5、岡村毅、「宗教者と医療者の協働可能性 医療者の立場から」、日本宗教学会 第 76 回学術大会、2017 年

6. 研究組織

(1)研究代表者

林田 康順 (HAYASHIDA, Koujun)

大正大学・文学部・教授

研究者番号：50384681

(2)研究分担者

小川 有閑 (OGAWA, Yukan)

大正大学・地域構想研究所・研究員

研究者番号：20751829

高瀬 顕功 (TAKASE, Akinori)

大正大学・地域構想研究所・助教

研究者番号：90751850

弓山 達也 (YUMIYAMA, Tatsuya)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育

院・教授

研究者番号：40311998

岡村 毅 (OKAMURA, Tsuyoshi)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：10463845

(3)連携研究者

藤森 雄介 (FUJIMORI, Yusuke)

淑徳大学・その他部局等・教授

研究者番号：20364896

(4)研究協力者

新名 正弥 (SHINMEI, Masaya)

問芝 志保 (TOISHIBA, Shiho)